

『手と脇腹の傷跡』井上隆晶牧師

エゼキエル書 37 章 9～14 節、ヨハネによる福音書 20 章 19～31 節

①【平安の秘訣＝キリストを真ん中に立たせる】

イエス様が復活した日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけ、隠れていました。イエス様の次は自分たちが捕まり殺されると思っていたからです。そんな恐れと不安でいっぱいだった彼らのところにイエス様は入って来られ、真ん中に立ち「あなたがたに平和があるように」と言われました。（19 節）そして彼らに手と脇腹の傷跡を見せ、自分が十字架につけられたイエス本人であることを示すと、弟子たちは喜びにあふれました。イエス様は再び「あなたがたに平和があるように」と言われました。（21 節）この「あなたがたに平和があるように」という挨拶は、キリスト教に受け継がれて礼拝の中で「主の平和がありますように」という言葉で用いられています。英語では「peace be with you!」です。

「平安」これは私たちが一番欲しいものです。弟子たちだけでなく、私たちも病気や戦争や人間関係のことで心が動揺し、恐れることがあります。でも礼拝をすると不思議と心が平安になるのです。私は祈祷をしている時に一番平和を感じます。神の前に立つと恐れは消え、平安が来るのです。それは心の中にキリストが入って来られるからだと思います。キリストが完全な平和です。イエス様は死ぬ前に「私は、平和をあなたがたに残し、私の平和を与える。私はこれを世が与えるように与えるのではない。」（ヨハネ 14:27）と言われました。この世の平和は、お金があることから来る安心、健康から来る安心、災害や戦争がないことから来る安心です。全部横から来る平和であり、その平和は一瞬の内にひっくり返されます。この世には完全な平和はないからです。しかしキリストが下さる平和はこのようなものとは違います。それは上から来る平和であり、聖霊による平和であり、死を前にしても消えない平和です。それなのにあるキリスト教徒たちは横に平安を求めます。この世を変え、環境を変え、社会制度を変えれば平和が来ると思っています。でもあなたの真ん中にキリストが立っていなければ、いくら周りを変えても平安は来ません。

●榎本保郎牧師はこう書いています。「キリスト教信仰は…中心をはっきり知らなければならぬ。円の中心が分かれば、中心から円周への距離はみな同じになる。…『光を造り、闇を創造し、平和をもたらし、災いを創造する者。私が主、これらのことをする者である。』（イザヤ 45:7）…それが分かれば闇も光も同じものになってくる。」

円の中心とはキリストです。パウロの言葉を借りるなら「神の秘められた計画とは、あなたがたのうちにおられるキリストです。」（コロサイ 1:27）このキリス

トを知ること（体験）をおろそかにして、枝葉的なこと（奉仕、運動）ばかりに熱心になっても何の意味もありません。本末転倒です。平安の秘訣は、心の真ん中にキリストを立てることです。「やっぱり健康が第一よね！ではなく、やっぱりキリストが第一よね！」と言いましょう。

②【新しいイスラエルである教会の誕生とその使命を与えられる】

イエス様はこの後「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」(21 節)といわれ、弟子たちに息を吹きかけ「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。誰の罪でもあなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」(22～23 節)と言われました。これはヨハネ福音書のペンテコステ（聖霊降臨）と言われている記事です。天地創造の始め、神様は人間の鼻に命の息を吹き入れて人を創造しましたが、ここで弟子たちはキリストによって神の息である聖霊を吹き入れられ、新しい体に再創造されたのです。それはキリストという体です。聖霊の油を注がれた者は、キリストになります。私たちも小さなキリストになったのです。それはイエス様の業を引き継ぐ者としてこの世に派遣されるためです。ここでは弟子たちはまだ未熟であり、恐れもあり、十分な信仰ありません。それでも教会はスタートさせられました。弱くても恐れてはいけません。出かけて行って人の罪を解くのです。「だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。誰の罪でもあなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る」と言われたからです。宗教というのは「レリジョン」といって「再び結ぶ」という意味です。神と人を結び、人と人を結ぶのが教会の仕事です。

●久し振りに母教会で同窓会がありました。泉牧師、川崎牧師、私の三人の大阪西野田教会の出身の牧師たちと信仰の友が集まりました。泉牧師が私を教会に誘い、川崎牧師が正教会に私を誘いました。またこの信徒がいなければ私は教会に繋がらず、この信徒が応援してくれなければ私は牧師になれませんでした。みんな不思議とつながっているのです。その真ん中にいて人を結んでいる糸はキリストという糸です。キリストが人と人を結び、出会わせているのです。だからその人の中からキリストがいなくなれば人はバラバラになります。教会は、神と人を結ぶ新しい祭司、新しいイスラエルとなったことを忘れないようにしましょう。

③【キリストと結ばれなければ信仰は生まれない】

弟子の一人であるトマスは、弟子たちと一緒にいなかったのでイエス様に会うことができませんでした。仲間の弟子たちが「私たちは主を見た」(25 節)といった時、彼は「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手を脇腹に入れてみなければ、私は決して信じない」(25 節)と言いました。トマスにはディディモ（双子）というあだ名がついています。それは彼の心の中に「信じる自分」と「信じられない自分」という二人の自分がいることを教えて

います。彼は「信じない！」と言いましたが、本当は「信じたい」のです。でも信じられないもどかしさ、悔しさが感じられます。私もそういう時がありましたから分かります。信じられる人を羨ましく思い、腹立たしく思ったことがあります。だからトマスとは私なのです。これが人間の本当の姿です。人間の限界です。信仰というものは自分の中から湧いて出るものではなく、神との交わりによって外から入って来るものだからです。八日の後（日曜日のこと）、弟子たちはまた家の中におりトマスも共にいました。弟子たちがトマスを礼拝に誘ったのでしょう。すると再びイエス様は姿を現し、トマスに「あなたの指をここに当てて、私の手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、私の脇腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい」（ヨハネ 20：27）と言われました。トマスはすぐに「私の主、私の神よ」（同 20：28）とすばらしい信仰告白をしました。信じるためには神からの働きかけが必要です。イエス様が八日の後に現れてくれないと、トマスは信じられなかったでしょう。しかし、そのイエス様にどうしても会いたいという思いがなければ会えないのです。電気器具はソケットとつながらなければ動きません。信仰も同じで、あなたがキリストに手を伸ばさなければ、キリストとつながらなければ信仰は入って来ないのです。イエス様は日曜日ごとに必ず教会の中に姿を現します。だからあなたもキリストに手を伸ばして下さい。

●キリストの復活した身体は霊ではなく神的な体であって、自由に部屋に入ることも出来ましたし、触ることも、食事も出来ました。栄光の身体なのに脇腹の傷、手足の傷は残るのだろうかと思ったのです。復活の体は輝かしいもの、力強いもの、朽ちないものなはずです。（I コリント 15：43）エマオの旅人に現れた時は、傷跡が無かったようなのです。傷跡は消えたり、現れたりします。ここではあえてトマスの為に傷跡を現わしたのではないのでしょうか。キリストの脇腹の傷に深く手を伸ばす、キリストの手の傷口に指を入れるというのは十字架のキリストを思い出すことであり、それは同時に自分の罪を思い出すことです。主が私の罪を負って下さったこと、それを赦して下さいたことを思い出すことなのです。トマスにはキリストに触れる、甘える必要があったからです。

キリスト教が始まったのは人間の力ではありません。弟子たちは恐れで何もできませんでした。死の力は人を恐怖で縛り、硬直させます。そこに命が入って来たのです。命に触れられた弟子たちは、恐れが消え、力が湧き、立ち上がり、動き出したのです。これがキリスト教のすごさです。キリストが復活したように復活するのです。だからゼロになっても、マイナスになっても大丈夫です。トマスのようにキリストに触れなさい。そうしたら信仰と命が始まります。キリストに触れたら必ず何かが始まります。彼は創造者であり、無から有を生み出す方だからです。この教会がそうでした。誰もいなくても、キリストに触れたら喜びと命が入って来て、動き出したのです。

●2世紀のリヨンの聖イレナエウスはこういっています。「主イエス・キリストは、

終りを初めに、すなわち人間を神に結び合わせるために、終りの時に人々の間で人間となった方である。」

人間を死で終わらせないために、あの方は人間の死を引き受けられました。だからいくらもう終わりだというような時にも、キリストに触れたら新しいことが始まるのです。だからトマスのようにキリストに手を伸ばし触れなさい。そうしたらあなたの中に何かが始まります。